

Title	<紹介>F・レーリヒ著 魚住昌良・小倉欣一訳 『中世ヨーロッパ都市と市民文化』
Author(s)	服部, 良久
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1978), 61(5): 787-788
Issue Date	1978-09-01
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/shirin_61_787">https://doi.org/10.14989/shirin_61_787</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

## 紹介

F・レーリヒ著

魚住昌良・小倉欣一訳

### 『中世ヨーロッパ都市と

### 市民文化』

原著は中世都市史、就中ハンザ史の碩学F・レーリヒが戦前、「プロピレイン世界史」第四巻のために執筆した章を、死後補訂の上単行本としたものである。章だては以下の通り。第一章 新文化勢力の台頭、第二章 東部ヨーロッパへの進出、第三章 都市と国家、第四章 帝国と国民諸国家の狭間、第五章 リューベックとニルンベルク、第六章 都市の住民、第七章 都市門閥と手工業者、第八章 市政の展開、第九章 結末

介 かくの如く本書は、僅かな紙数中に都市史のあらゆるテーマが凝縮している点において、主として成立史の分野に限定された従来の翻訳都市史文献とは異なる。しかも

かかる多面的な考察は決して総花的な概説に終わることなく、経糸をなす一貫した論理と、緯糸をなす直観的とさえ言いうる鋭角的な突込みは、本書を個性豊かな都市史叙述の古典とした。

レーリヒの論理―基本的視角とは、中世市民階級―遠隔地商人の歴史的形成力、である。中世都市成立、発展の担い手を遠隔地商人に求める観点はその後の研究においてこそ人口に膾炙したところであるが、ビュヒャーの発展段階論、ゾンバルトの地代蓄積論が横行した当時、それ自体積極的な自己主張であった。のみならずレーリヒは従来のギルド説とS・リーチェルの市場定住説を社会経済史の立場から遠隔地商人を媒介として結合し、「建設企業者都市」なる概念にまで発展させたのである。本書の随処に現われるこの観点は、過度に普遍化されるに及んでTh・マイヤー、L・v・ヴィンターフェルトの批判を浴びるに至ったのはやむを得なかったにせよ、少なくとも第二章で述べられたリューベックを起点とするバルト海都市建設に関しては尚、有

効であろう。これに続く、ゴートラントのヴィスビーを拠点とするいわゆる商人ハンザから、リューベックを中心とする都市ハンザへの転換、その前提をなした遍歴商業から文書商業への進歩、等々の豊富な例証を伴う生々とした叙述には、リューベックを伴う生々とした叙述には、リューベック古文書館長をも勤めたハンザ史家レーリヒの面目躍如たるものがある。但しレーリヒが、かかるバルト海都市建設を、先行する「ドイツ商人によるバルト海の経済支配というひとつの経済政策プログラム」の自己展開過程であったと断ずるとき、そこにアルンヴィスト、レーリヒの本領とは無縁である筈の古びた観念史学的一端を見ぬわけにはゆかない。

本書のもう一つの特色は、「都市と国家」の問題が叙述全体を貫いている点にある。英、仏において中世後期以降、都市は自治権を限定されつつも王権の下で経済的發展を続けたのに対し、ドイツ都市が政治的経済的に後退していったのは何故か。レーリヒによれば、ドイツ都市は国民国家と結合しえず、経済領域をも細分化した俵儒国家

「領邦の庄迫の下で、これに完全に従属するか、或いは自らの狭少な領域を強固化しつつ、その内部で閉鎖的なツンフト的都市経済によって自己保存を策する他はなかった。

「世界経済」の破壊者としての領邦国家なるほど流通主義的立場からレーリヒが、これを規定した国制的枠組に究極の原因ありとしたのは首肯される。しかし社会経済史家レーリヒは、逆に、かかる狭隘な領邦経済の形成を許したドイツ都市の経済的性格、否、ドイツ経済社会全般こそ問題とすべきであった。

第四章はフランドル・ネーデルランド都市史のユニークな鳥瞰図をなす。第五章は、一五世紀において、一方で硬直化した都市経済を示すリユーベックと、他方で開放的国際市場として発展を続けるニールンベルクを対比したものであるが、両タイプを単に老朽化した都市と最盛期にある都市の相違と見做すのみでは不充分であろう。少なくとも、特権的流通を基盤としたハンザ都市と、金属工業等の生産的基盤を有した南独都市の経済構造上の相違は看過されては

なるまい。第七章は都市の社会史であるが、中世末期、都市社会の矛盾を一身に負った下層民「非市民に關する血の通った叙述は、歴史家レーリヒの幅を感じさせる。

都市史文献の翻訳には最適任と思われる両氏は、M・プロックのそれにも比すべき格調高い原著の文体を能く日本語に移された。ただ次の箇処について再考を請う次第である。一八頁（原著一七頁）一二二〇年（フライブルク建設）↓一二〇年。二二頁（原著一九頁）「ハンザ同盟」という語は原文になく、歴史用語としても誤り。三七頁（原著三〇頁）……他の諸候の手に渡ることがなくなつて↓……ないかぎりで

（現実には諸候への質入れは屢々あった）四三頁（原著三五頁）ハインリヒ四世↓同六世。五九頁（原著四七頁）ブーヴァンヌ↓ブーヴィーヌ、一三九頁（原著一〇八頁）地縁的と訳された *ortlich* は局地的（一都市的）というほどの意味であつて、ツンフトは決して地縁的組織ではなかつた。この他若干の地名表記に誤植がみられる。（四六判 一六九頁 索引等二五頁

一九七八年 創文社 一五〇〇円

（服部良久 天理大学講師）

C・V・ウッドワード著

清水博・長田豊臣・有賀貞訳

『アメリカ人種差別の歴史』

本書は、C. Vann Woodward, *The Strange Career of Jim Crow* 改訂第三版（オクスフォード大学出版部、一九七四年）の全訳である。初版は一九五五年に、また改訂再版は一九六六年にそれぞれ出版された。

著者ウッドワード教授は、アメリカ南部史研究の第一人者であるばかりでなく、現代アメリカ史学界を代表する学者の一人としてつとにその名声は高く、鋭い洞察と幅広くバランスのとれた歴史的感覺に貫かれた幾多の名著を世に送り出してきた。とりわけ、*Tom Watson-Agrarian Rebel* (1938), *Origins of the New South: 1877-1913* (1951), *Remnant and Reaction* (1951) などとは、いわゆる「一八七七年の妥協」から